

2021 年夏

マラヤ大学オンライン研修体験レポート
English Language Course



目次

a. プログラムの概要	3
a-1. マラヤ大学の紹介	3
a-2. プログラムの概要	4
期間	4
参加者の出身大学	4
参加学生数	4
使用したソフトウェア	4
主なスケジュール	4
a-3. 各授業や活動の概要	6
授業ごとの内容	6
アクティビティの内容	7
b. プログラムのハイライト	9
グループディスカッションを通して（文学部 1 年 篠田真名）	9
授業外アクティビティの人狼ゲーム（理学部 1 年 鈴木智也）	9
Malaysian Studies（農学部 1 年 方波見さち）	10
英語の娯楽に触れることの意義（農学部 1 年 松田夏奈）	11
Funny Debate（経済学部 1 年 高屋映里）	11
ライティングについての知識（理学部 1 年 花木ひかり）	12
バーチャルキャンパスツアー（工学部 2 年 池尾典）	13
日本文化の発信（工学部 2 年 原幸日）	13
マレーシア文化の紹介（医学部 2 年 佐藤朱李）	14
マラヤ大学の学生（バディ）との交流（文学部 2 年 高橋晴佳）	14
Reading and Vocabulary Class（工学部 3 年 ト部真聖）	15
英語の文法の授業から養うことのできた国際協調性（工学部 3 年 三瓶翔太）	16
バディとの交流（工学部 3 年 伊藤祐希）	16

現地で使用するマレー語のレクチャーについて（医学系研究科修士 1 年 汐川奈々子）	17
バディとの交流でしか得られないもの（医工学研究科修士 1 年 樋口健）	17
c. 研修体験・成果	19
マラヤ大学オンライン留学での成長（文学部 1 年 篠田真名）	19
研修によって得た異文化理解（理学部 1 年 鈴木智也）	20
研修を通して得られた成果（農学部 1 年 方波見さち）	21
オンライン留学による研修成果（農学部 1 年 松田夏奈）	22
プログラム全体を通して得たこと（経済学部 1 年 高屋映里）	23
多文化社会の魅力と英語に対する認識の変化（理学部 1 年 花木ひかり）	24
特徴的研修成果（工学部 2 年 池尾典）	26
プログラムを通じて得た経験と成長（工学部 2 年 原幸日）	27
プログラムで得たこと（医学部 2 年 佐藤朱李）	28
Summer Enrichment Programme での体験・成果（文学部 2 年 高橋晴佳）	29
プログラムを通して習得したこと（工学部 3 年 ト部真聖）	30
英語はあくまでコミュニケーションのツール（工学部 3 年 三瓶翔太）	32
英語との距離（工学部 3 年 伊藤祐希）	33
オンラインで学べたことの意義について（医学系研究科修士 1 年 汐川奈々子）	34
本研修で得ることができた体験・成果（医工学研究科修士 1 年 樋口健）	35

a. プログラムの概要

a-1. マラヤ大学の紹介

マラヤ大学は、マレーシアの首都クアラルンプールにある、マレーシアで最も古い大学である。14の学部を有しており、マラヤ大学オンラインプログラム English Language Course を提供していたのは Faculty of Arts and Social science (FASS) で、留学期間中参加者のサポートを担った現地学生 (i-smart buddy) は全員この FASS の学生だった。

ここではオンライン留学に関連するマラヤ大学の魅力を3点挙げる。

まず、マレーシアと日本の時差は1時間で、時差があまりないということが利点として挙げられる。プログラム概要で後述する通り、このプログラムは朝から夕方まで授業・交流があるが、これを可能にしているのはこの時差の短さである。

次に、英語学習の観点における利点に触れる。マレーシアは英語のイメージがあまりないかもしれないが、普段の会話ではマレー語が話される一方で、英語も日常的に使用される。マレーシアの人々のほとんどがマレー語、英語の両方を話すことができ、バイリンガル、トリリンガルがほとんどである。そのため現地学生との英語での会話により英語力を鍛えることが可能である。また、マレーシアの人々は完全にネイティブというわけではなく英語を学んで身に付けているため、マラヤ大の先生による英語の授業はネイティブではない我々にとって、とても分かりやすいという利点もある。

そして最後にマレーシアの多文化社会について述べる。マレーシアにはマレー系、中華系、インド系の三つの民族が暮らしており、宗教もイスラム教、仏教、キリスト教と多様である。このプログラムで交流する現地学生の民族、宗教もこのように多様であり、プログラムを通して様々なバックグラウンドを持つ現地学生と交流できることもマラヤ大学ならではの魅力である。

a-2. プログラムの概要

期間

2021 年 8 月 9 日（月）～8 月 27 日（金）の 3 週間

参加者の出身大学

UNIVERSITI OF MALAYA

東北大学

大阪府立大学

岡山大学

関西学院大学

参加学生数

日本人学生（東北大生）15 人、マレーシア人学生（バディ）15 人

日本人学生 2 人に対し 1 人のマレーシア人学生がバディとしてつき、授業の課題やアクティビティをともに行う。授業時間外にも連絡を取ることができ、映画を見たり、お互いの文化を紹介しあったり、プログラムに含まれてないことを自由に行うこともできる。

使用したソフトウェア

Kahoot!

Kumospace

skribbl

Zoom

LINE

Instagram

主なスケジュール

プログラムの内容は主に 3 つに分けられる。授業、授業後のアクティビティ、バディとの交流である。

授業は Malaysian studies、Speaking and Pronunciation、Writing and Composition、Reading and Vocabulary、Grammar Usage の 5 科目があり、表 1 のように各科目が週 2 回

ずつ行われる。授業は1日に2コマあり、週で合計10コマの授業を受ける。授業は日本時間で、一限が9:30～11:30、二限が12:30～14:30に行われる。したがって3週間で計60時間も、英語で授業を受けることになる。授業後15:30から、マレーシア人学生主催のアクティビティが週に3回開催される。アクティビティに関しては、前もって連絡が来る（詳しくはアクティビティの内容に記載）。それ以外の時間は、バディとの交流の時間になる。授業によってはバディと協力して行わなければならない課題が出るものもあるので、週2、3回はその件でバディと通話等を行う必要があった（詳しくは授業ごとの内容に記載）。

表1：1週間のスケジュール（時間はマレーシア時間）

DAY	8.30 - 10.30		11.00 – 13.00		14.00 – 16.00
Monday	Malaysian Studies	BREAK	Writing and Composition	BREAK	Virtual activities and Story Telling with i-Smart Buddies
Tuesday	Speaking and Pronunciation		Grammar Usage		
Wednesday	Reading and Vocabulary		Malaysian Studies		
Thursday	Writing and Composition		Speaking and Pronunciation		
Friday	Grammar Usage		Reading and Vocabulary		
Saturday	Virtual Tour				
Sunday	Virtual Tour				

a-3. 各授業や活動の概要

授業ごとの内容

● Malaysian Studies

講師：Mr. Aiman

この授業では、マレーシアの歴史や文化について詳しく学ぶことができる。具体的には、歴史、エチケット、宗教、観光地、行事、結婚式、伝統的な服装や遊び、食事、音楽やダンスについて学んだ。授業中には関連した様々な動画を見たり、マレー語で実際に簡単な自己紹介をしたりと楽しみながら学ぶことができる。提出物は初日以外なく、持ち込みなしのオンラインテストが最終日にあった。

● Writing and Composition

講師：Mr. Shaiful

初回授業では writing の基礎、2 回目、3 回目では Argumentative Essay、4 回目では Descriptive Essay、5 回目では Creative Writing について学んだ。各回、授業で習ったことを基に英作文を書く課題があった。最終回では就職に必要な書類の書き方を学び、その後、授業資料を見ながら行う 60 分間のテストがあった。どの授業も生徒の作文を講師が添削しながら進むので、挙手した方が講師のアドバイスを聞くことができ、課題に取り組みやすくなる。

● Speaking and pronunciation

講師：Ms. Amira

初回～2 回目の授業では簡単にできる英語発音のトレーニングを行い、発音のトレーニングを行っている様子を各自ビデオに録画し提出する課題もあった。3 回目以降は自然災害を題材とする動画をいくつか視聴し、グループやクラス内で自分の意見を述べるディベートや、実際地震が起こった時どのようにグループ内で役割分担して生き延びるか、など面白い題材のもとディベートを行った。積極的に参加すればするほどスピーキングの技術が改善されるような内容になっていた。

● Grammar Usage

講師：Mr. Hashim

この授業では、12 の時制の用法を学習した。様々な問題を解きながら、各場面における適切な時制とその根拠を理解することができた。限られた時間の中で多くの問題を扱うため、予習は必須であった。授業時間外には、グループで話し合いながら予習やテストに取り組んだ。中には日常的に英語を使うマレーシアの学生でさえも戸惑う問題もあり、課題

を通してより詳しい文法の知識を身につけることができた。最終日には、テストで知識を総確認した。

● Reading and Vocabulary

講師：Ms. Maryam

この授業はリーディングの授業ではあるが、文章を読むことよりも、映像作品を視聴し、それを題材として授業が進められることが多かった。具体的には、週末の夜などに映画をグループで観賞し、映画のあらすじと、新たに知った単語について授業でプレゼンテーションをする活動などがあった。また、英語の物語を読み、あらすじと新出語彙を発表したり、配役を決めて物語を何人かで音読したりする活動も行った。課題は、映画を見ることと、映画についてのプレゼンの準備があった。

アクティビティの内容

● 授業外アクティビティの概要

平日のうち3日～5日程度、授業外のアクティビティが行われる。よって、授業自体は14:30に終わるものの、実際には17:00ごろまでイベントがある日が多い。内容としては、ジェスチャーゲームやクイズ大会などのレクリエーション的なものから、現地の食べ物や民族衣装を実際に見せてもらったり、伝統的なダンスを踊ったりといったものまで様々である。どれも堅苦しくはなく、楽しみながら参加できる。クラス全体でのイベントの他にも、自分のバディとお喋りしたり、何人かで集まって人狼ゲームが行われたりもした。これらの活動内容はバディによって異なる。また、バディが個人的に企画してくれるイベントは、土日に開催されることもあるので、週末の予定は前もって伝えておくことが好ましい。

● 人狼ゲーム(Werewolf)

複数の現地の学生と日本人学生がランダムに同じグループとなり、リモート上で人狼ゲームを行う。ルールや主なプレイ方法については日本で行われているものとほとんど変わらない。現地の学生がスムーズに進行し、ゲームを盛り上げてくれたので、自分も楽しむことができた。プログラム中には様々なアクティビティを行ったが、現地の学生と同じくらい盛り上げるために声を出すことが重要であると改めて実感した。

● マレーシア・バーチャルツアー

マラヤ大学の学生が、首都であるクアラルンプールを始め、マラッカやペナンを紹介してくれた。ツインタワーやセントラルマーケットなどの観光地や、屋台に売っている食べ物などを体験した。動画を視聴しながらツアーに参加するが、チャットも盛んでそこで質

問したり、会話を楽しんだりできる。別日には、マラヤ大学について紹介してくれるバーチャルツアーもあった。バディが実際に大学周辺を運転しながら撮った動画を使って大学生活について説明してくれた。

- **日本文化紹介**

日本人バディから日本の文化をマレーシアのバディにプレゼンした。日本人バディも様々な学校から集まっているため、それぞれの学校の地域を分担してその地域の食べ物や観光地などを紹介した。その他にも日本の漫画や伝統的な遊び、日本語のスラングなど内容は多岐にわたり、日本の文化を様々な面から紹介した。また、質問の時間には様々な質問が集まり、盛り上がった。

- **その他のアクティビティ**

授業時間外には、バディと LINE や ZOOM で自由に交流した。LINE でのやり取りは日常的に行われ、その日の食事やペットの様子などの雑談を楽しんだり、授業や宿題で分からなかったところを質問したりした。ZOOM での交流は、各バディによるが主に週末に行った。会話やゲームを楽しんだり、自分の出身地をプレゼンしたりと、非常に濃密な時間を過ごすことができた。個人的な交流を通して、プログラム終了後も連絡を取り合えるような関係を築くことができるのは、大きな魅力の一つである。

b. プログラムのハイライト

ここでは、参加者それぞれがプログラムの中で最も印象に残っていることについて述べる。

グループディスカッションを通して

文学部 1 年 篠田真名

本プログラムでは、リーディングやグラマー、スピーキングなど様々な授業があったが、どの授業もマレーシアの学生と日本人学生がグループを組み、話し合いながら、課題に取り組む機会が数多くあった。私を含め、ほとんどの日本人学生が始めは消極的だったが、マレーシアの学生の姿に刺激を受け、最終的に全ての日本人学生が積極的に意見を言うことができるほどに成長することができた。マレーシアの学生は初対面の人であっても気さくに話しかけたり、進んで意見を述べたり、時には明るく冗談を交えながら、誰でも話し合いに参加しやすい雰囲気を作り出してくれた。彼らに感化され、積極的な姿勢を身につけることができたことは、とても大きな収穫だった。また、英語に対する自信もついた。ディスカッションでは、説得力のある主張をするため、接続詞や副詞を効果的に使いながら分かりやすく根拠を説明することが求められた。私は、このプログラムに参加する前まで、辞書を使って完璧に仕上げた英文原稿を読むという形式的なディスカッションしか行っていたことがなかった。そのため、英文の原稿なしの主張はとても困難に感じたうえ、意見が伝わらないのではないかという心配もあった。しかし、発表を重ねるうちに、細部の間違いはあまり問題ではなく、知っている表現を使って、主張と理由を述べることであれば、ある程度の論理性を持って伝えることができると分かった。相手に意見を主張できたという経験は、英語を使うことに対する大きな自信につながった。

授業外アクティビティの人狼ゲーム

理学部 1 年 鈴木智也

私がこのプログラムで最も印象に残っていることは、現地のバディと行った werewolf game(人狼ゲーム)である。このアクティビティは、授業後のアクティビティの時間に行わ

れ、10 人程度の班に分かれてゲームを行った。ルール自体は日本でよく行われているものと同じなのだが、英語でゲームを行うという点が非常に新鮮であった。

この人狼ゲームでは、私は人狼役としてゲームに参加し、英語で現地のバディ達をうまく騙して、最終的に人狼陣営を勝利に導くことができた。もう一人の人狼役の現地バディとコミュニケーションをとり、意見交換をしながら英語で場の話し合いを動かしていったり、英語で「自分は占い師である」のような嘘をついたりすることが、とてもスリリングで非常に楽しかった。また、自分は英語でこれほど様々な意見を表現できるのかと、感慨に近いものを抱いたりもした。

ゲーム中の話し合いでは、現地のバディが会議をリードしてくれたので、必要以上に緊張せず、肩の力を抜いてゲームができたことも、楽しめた要因の一つだったと思う。ただ、自分から積極的に発言し、コミュニケーションを仕掛けていくことが、このようなアクティビティを楽しむ最大のコツであることは、改めて強調しておきたい。

Malaysian Studies

農学部 1 年 方波見さち

週に 2 回ある Malaysian Studies は、授業時間にマレーシアの文化が学べる良い機会であるとともに、異文化を学び、理解することの大切さを感じる貴重な機会でもあった。授業を通して、マレーシアの歴史、結婚式、エチケット、民族、宗教、衣装、食文化、音楽など、マレーシアの様々な文化的側面に触れることができた。

マレーシアは、主に、マレー系、中国系、インド系の民族で構成されており、それぞれの民族固有の文化があることで、マレーシアが多文化社会を形成しているということを学んだ。さらに、それぞれの民族が、イスラム教、仏教、キリスト教、ヒンドゥー教などを信仰しており、それらの宗教が他の文化に大きく影響を与えていた。特に伝統的な結婚式には、それぞれの民族独自の文化が反映されており、様々な文化について理解を深めることができた。さらに、授業中に学んだ、マレーシアの伝統工芸品や、観光地、衣装はとても魅力的な物が多く、今後、実際にマレーシアを訪れてみたいという気持ちが大きくなった。

このように、授業を通して、多くのマレーシア文化を学ぶことができた。また、マレーシアでは、それぞれの民族が互いの文化を尊重し合うことで、調和しながら生活しているということを実際に感じ、異文化を学び、理解することが大切だということを学ぶことができた。さらに、授業を通して、マレーシアの文化を知ること、授業後のアクティビティでのマレーシアの文化紹介がより有意義なものとなった。

英語の娯楽に触れることの意義

農学部 1 年 松田夏奈

私の今回のプログラムのハイライトは英語の娯楽に触れる体験をしたことだ。Reading & Vocabulary のクラスでは、短い話を読んだり、映画を見たり、音楽を聴いたり、また、それらの要旨や印象に残った言葉、自分にとっての新しい語彙のプレゼンを行ったりすることが多かった。今までにも何度か英語で書かれた本を読んだことはあったけれど、日本語の字幕がなく、吹き替えもされていない外国の映画を見るのは初めてで、もちろん大変ではあったが、新鮮で楽しかった。また、自分の意志とは関係なく進んでいってしまう映像を理解しなければならないので、英語力を向上させるという点でも大きな意味があると思った。さらに、吹き替えや日本語への翻訳の過程でどうしても少し日本人向けになってしまうので、英語圏の文化に触れるという意味でもこのような体験は重要だと感じた。

マレーシアのバディたちのプレゼンを作成する能力の高さにも驚いた。Reading & Vocabulary のクラスのみに関わらず、プログラム全体を通してプレゼンの機会が何度かあったが、視覚的に興味を引き、かつ分かりやすいスライドを作成していた。今後も日本語、英語に関わらず様々な場面でプレゼンをする機会があると考えられるので、マレーシアのバディたちのプレゼン技術を参考にしつつ、自分のプレゼン作成能力を向上させていきたい。

Funny Debate

経済学部 1 年 高屋映里

この 3 週間のプログラムの中で印象に残っていることの一つとして、Speaking の授業の最後 2 回で行われた Funny debate が挙げられる。Funny debate では、あるディベートのトピックに対して賛成・反対・ジャッジの 3 つの班に分かれ、賛成・反対のグループの主張や議論を聞いたジャッジのグループのメンバーが相談してどちらの方がより説得力があり、かつ面白い主張をしていたかを判断する。このディベートの醍醐味は「Funny」という言葉からも分かるように議論するトピック自体が非常に愉快なところにある。例えば、「エイリアンは私たちと一緒に暮らしている」「3 つ目の腕を持つ方が良いか、それとも 3 つ目の足を持つ方が良いか」などのトピックについて意見をぶつけ合った。賛成と反対の立場は選ぶことができずにその場で割り当てられるため、どちらの立場にいてもいいような柔軟な思考力も必要とされる。1 回目の授業で日本人学生は発言することを躊躇して

しまいマレーシアの学生に頼ってしまっていた。自分としても積極的に参加できなかったことに後悔した。しかし、2回目の授業は3週間のプログラムを通して最後の授業だったこともあり、日本人学生も積極的に発言をしており、ディベートも大変盛り上がった。マレーシアの学生はディベートの準備段階であるブレインストーミングの時に話をまとめてくれたり、ディベートの時間にも同じ班のメンバーが発言したときにはZOOMのチャット機能でコメントするなどして応援してくれたりしていた。このようなマレーシアの学生たちのサポートもあり、難易度の高いディベートの授業も楽しんで受けることができた。

ライティングについての知識

理学部 1 年 花木ひかり

このプログラムの英語の授業の一つ、writing and composition のクラスが自分にとっては大変有意義なものであった。このクラスでは様々な形式の英語の文章の書き方について、シンプルで明瞭なポイントを文章形式ごとに教わった。例えば argumentative essay(論証文)では P(point), E(elaboration), E(example), L(link)から主張の中心となるパラグラフを構成する、などである。これらのポイント一つ一つはあまりに単純でこんなことでいい文章が書けるのかとはじめは思ったが、このポイントを使うだけで主張が明瞭になったり、今まで文の構成を考えるのに費やしていた労力を他の部分に使うことができるようになり内容の本質などにより意識を向けることができるようになったりと、様々な効果があった。また、書いた文を授業で共有する機会も設けられており、人の書いた文章と自分のものとの比較からも学ぶことが多かった。

この授業で特に印象的だった内容として、pass the story を紹介したい。このアクティビティは、一枚の画像を見てその絵に合う物語を参加者全員で作りに上げていくというものである。どのように作りに上げていくかというと、一人が一文を作って物語を開始し、どんどん人を交代して一文ずつ足していくのである。自分が想像した物語の続きがどんどん塗り替えられていき、その都度想像力を掻き立てられた。この時意識するポイントは、副詞を効果的に使う、比喻表現を使う、などである。これらを意識すると物語がより一層想像しやすい物になっていき、これらのポイントの有用性を肌で感じる事ができた。

バーチャルキャンパスツアー

工学部2年 池尾典

今回の研修では基本的に午前からお昼過ぎにかけて授業を受け、午後にはバディとのアクティビティを行った。ここでは午後のアクティビティの中でも印象に残ったバーチャルキャンパスツアーについて述べる。これはもともと予定されていた活動ではなく、私のバディが独自に提案してくれたものである。つまり、プログラムに組み込まれていない活動も自由にバディで行うこともできる。オンラインでのプログラム実施によって現地に赴けなかった分、このツアーでは様々な場所を紹介してくれた。マラヤ大学のキャンパスは非常に広く、一つの街であるかのようにであった。こちらが質問したことや見てみたい場所にも対応してくれ、植物園や多数のコート、カフェテリア、学部の建物などを見ることができた。また、こちらの大学についても質問をしてくれることがあり、それぞれのキャンパスの特徴について理解することができた。この活動からは、相手のキャンパスや自分のキャンパスの特徴を知ることの他にも、英語での日常的なコミュニケーションや質問の応答の実践経験を楽しみながら得ることができた。このように、普通の授業とはまた違った学び方ができることも今回の研修のとても良い点であった。

日本文化の発信

工学部2年 原幸日

私が印象に残っているのは、放課後に日本文化についてマレーシアのバディたちにプレゼンテーションを行ったことだ。私を含め数名の日本人学生がスライドを作成し、日本の言語や食文化、漫画・アニメなど多種多様なテーマについて紹介した。発表の準備をしたり他の人の発表を聞いたりする中で日本人である私自身、自国の文化についての発見が多くあり、日本文化についての理解を深めることができた。バディたちも日本について興味を持ってくれ、紹介した日本のスラングを実際に使ったり、多くの質問をしたりしてくれ、互いに楽しく有意義な時間を過ごすことができた。またそれと同時に日本文化との向き合い方について考え直すきっかけともなった。これは質問を受ける中で伝統的な衣服や行事が私たちの生活から消えつつあることに気づかされたからだ。例えば「どうして普段から着物を着ないのか」という質問があった。これまで普段は着物でなく洋服を着ることに疑問など感じたことはなかったが、この質問を受けて自分たちが伝統的な文化をないが

しろにしているのは問題かもしれないと思うようになった。自国の文化を客観的に見た時にどのように見えるのかを知る良い経験ができたと思う。

マレーシア文化の紹介

医学部 2 年 佐藤朱李

私にとって最も印象に残っているのは、マレーシアの文化交流である。授業後のアクティビティの 1 つで、バディがマレーシアの衣服や食べ物を実際に見せながら紹介してくれた。全員がそれぞれの宗教の伝統衣装を着て参加しており、Malaysian Studies の授業で習ったことが本当に生活に取り込まれていると学んだ。日本人が浴衣や振袖など日本の伝統衣装を持っていないのとは対照的で、自分だけの伝統衣装を持っていることをうらやましく感じた。また、数千円で手軽に買えることにも驚いた。食べ物についても日本とは全く異なり、何から作られているのか想像もできないものを見せてくれた。特に、マレーシアのお菓子には鮮やかな緑色が多く含まれており、マレーシアに行ったときには体験してみたいと思った。

この日のアクティビティの後半には、Sumazau dance というマレーシアの伝統的なダンスをバディと一緒に練習した。シンプルな動きの繰り返しで踊りやすかったため、画面越しでの参加だったが十分に楽しめた。私はバディから誘ってもらい、全員の前で踊る機会を得た。今まではダンスが苦手なこともあり、このような機会には積極的になれなかったが、今回は挑戦でき、留学を通して行動力を変えることができた実感した。

マラヤ大学の学生（バディ）との交流

文学部 2 年 高橋晴佳

このプログラム全体を通して最も印象に残っているのは、バディとの交流である。このプログラムでは、全ての授業にバディも一緒に参加するほか、放課後や週末にはバディ主催のアクティビティが多数用意されており、多くの時間をバディの方々と過ごすことができる。

まず、授業を一緒に受講することで、マレーシアの学生たちが普段どのように授業を受講しているのかを見ることができる。特に私自身、日本人学生とは違った、マレーシアの

学生たちの主体的な授業への参加態度に大変刺激を受けた。さらに、同じ授業を受けているので、授業中に分からなかったところを相談しやすく、私もプログラム期間中、何度もお世話になった。また、グループで取り組む課題も多く課され、その課題に取り組む中でバディとコミュニケーションを取りながら協力して課題に取り組んだ。放課後や週末のバディ主催のアクティビティではバディの方々がバーチャルツアーやオンライン上でできるゲームなどを準備してくださった。そうしたアクティビティの中でコミュニケーションをとっていく中で、マレーシアの学生だけでなく、日本人学生同士でも、互いのことをよく知ることができたのではないかと感じている。バディとはプログラム終了後も連絡を取り合っている。オンラインでここまでの友人関係を築くことができるのはこのプログラムの最大の魅力ではないか。

Reading and Vocabulary Class

工学部 3 年 ト部真聖

私は、reading and vocabulary のクラスが印象に残っている。この授業では、自分たちで選んだ好きな映画、講師の先生が提供してくれる物語を読んで、その要約やそこからどのような考えを持ったかを発表した。また、自分にとって新しい単語を抜き出しその単語の意味と類義語と例文を調べることで、語彙力の強化を行った。この授業を通して良かったなと感じる点は2つある。1つは、楽しみながら英語が学習できた点だ。グループごとに好きな映画を選ぶのだが、私の班は「ハリーポッター賢者の石」とディズニー映画の「モアナと伝説の海」を選んだ。土日にグループで集まって、一緒に映画を見たり、また好きな映画の話で盛り上がったりしたことはこのプログラムの思い出の1つとなっている。余談だが、ハリーポッターが好きなマラヤ大学の学生はとても多く、自分だったらどの寮に入るかななどの話で盛り上がったので、ハリーポッターは話のネタとしておすすめである。2つ目は、英語の勉強の方法を学んだ点だ。実際、マレーシアのローカルバディたちは英語が流暢で、そして多くの映画や本を読んでいた。自分自身、この2つの映画や他にクラスで読んだ物語から多くの単語やコロケーションを学んだ。自分の好きな方法で英語に触れることが英語力アップの秘訣なのではないかと感じた。このような、今まで受けたことが無いようなスタイルの英語の授業は新鮮で、そしてとてもためになった。

英語の文法の授業から養うことのできた国際協調性

工学部 3 年 三瓶翔太

プログラムの概要で述べた Grammar Usage のクラスでは、現在形、現在完了形、現在進行形、過去形、過去完了形、過去進行形、未来形、未来完了形、未来進行形の 12 種類の時制について学んだ。

これらは中学や高校でも学んだことではあるが、英語で再度受け直すことにより、それぞれの細かいニュアンスの違いについてより理解を深めることができた。例えば、同じ未来形として will と be going to があるが、会話の前から事前に決まっていた予定について述べる場合は be going to を、会話の最中に決めた予定について述べる場合には will を使うといったように、これらは状況において使い分けを学習した。また、未来を表す表現でも、電車の発車時刻のようなスケジュールに則っている場合は現在形を、未来に向かって現在から行動を実行している場合は現在進行形を用いるといった時制の新たな側面についても学習した。

上記のことは日本語でも学習できるかもしれない。しかし、それらに加えて貴重な経験となったのが「現地の学生と問題の解答について議論したこと」である。毎回の授業で、学習した文法に関する課題が与えられるが、3~4 人のグループで相談して解答することになっている。そして、グループ内の議論を通して「マレーシアの学生が必ずしも文法を完璧に理解しているとは限らない」ということを見いだした。プログラム序盤で私は、マレーシアの学生の方が私よりも完全に英語が優れているのだから彼らに任せておけば良いと考えていた。しかしいざ蓋を開けてみると、彼らでも所々文法を間違っていることがあった。このことを踏まえて私は積極的に自分の意見を英語で述べるようし、適所マレーシアの学生に文法について教えるようになり、グループ内全員の文法の理解を促すというかけがえのない体験をすることができた。

バディとの交流

工学部 3 年 伊藤祐希

このプログラムで私が一番印象に残っていることは、授業外に行われたバディとの交流である。授業外のアクティビティに関しては基本的に 2 日に 1 回用意されていたが、それ以外は自分のバディとのフリーアクティビティとなっていた。そこでは主にバディとの雑談を楽しんだ。ビデオ通話で、趣味の事や、マレーシアのコロナの状況、そして宗教とい

う日本人にはあまりなじみのないことについても話を聞くことができた。バディは年も近く、自分と同じような大学生であるが、宗教を信仰しているという相違点を見つけ、彼が私たち日本人とは異なる文化を持っていることを実感した。一方で、K-pop のアイドルが好きであることや、同じディズニー映画が好きであることなど、自分との共通点も見つけ、日本人の友達と話すのと同じように会話を楽しむことができた。人種や宗教などの文化の違いがあったとしても、大部分は私たちとさほど変わらず、英語力が十分でなくても仲良くなりたいという意味を持ち、異文化を尊重する気持ちがあれば、仲を深めることはそう難しいことではないと感じた。

現地で使用するマレー語のレクチャーについて

医学系研究科修士 1 年 汐川菜々子

今回のプログラムでは、マレーシアの文化について深く知ることができたことはもちろん、マレー語についても学ぶ機会が多くあった。特に Malaysian Studies では基本的な日常会話で使える例文（私の名前は〇〇です、私は〇歳ですなど）を学んだ。現地の学生同士ではマレー語と英語を混ぜて会話をするらしく、英語もマレー語も劣らず流暢な彼らの言語力には驚かされた。私は週に一回程度バディとのアクティビティでマレー語のスラング等について教えてもらえる機会もあり、かなりフランクに使用できるマレー語についても知ることができ、マレー語を使うと現地の学生がかなり喜んでくれることが印象的であった。マレーシアでは小学生に上がる頃から英語を学び、同時にマレー語の授業時間も多く確保しているためマレー語はもちろん英語も流暢である。Malaysian Studies では最後にテストがあり、マレー語も多く出題されていたため、軽く学習しておくことやバディに積極的に質問していくことをおすすめする。

バディとの交流でしか得られないもの

医工学研究科修士 1 年 樋口健

本プログラムでは、日本人学生 2 人に対してマラヤ大学の学生 1 人がバディとして組むシステムが最大の特徴となっており、彼らとは授業だけでなく課外活動においても友人として交流することができる。私はこのバディとの交流を通して、英語やマレーシアの文化だけでなく、彼らの人柄や価値観、イスラム教などの宗教に至るまでを身近に感じて学ぶことができ、非常に有意義で貴重な経験をすることができた。

私たち3人は、授業以外の自由時間にお互いの国の文化や食べ物、近所の風景などを気軽に紹介して異文化交流を行った。また、バディから Jawi（マレー語のアルファベット）を教わったり、他のグループと共に Werewolf ゲームをして積極的に交流を楽しんだりすることができた。また私のバディはムスリムであったため、モスクでの金曜礼拝の様子を撮影した写真で説明してくれたり、ラマダンやハリラヤの様子などを自身の体験を踏まえて大変親切に教えてくれたりした。さらに、研修期間中に彼の祖父が不幸にも亡くなってしまった際には、驚くことにお葬式や Tahlil（葬儀後に行う祈りの集会）の様子までも写真で、私たちと共有してくれた。私は、ここまで親切にしてくれる彼のことが心配になってしまったが、彼は、あまり長い間悲しむよりも明るく笑顔でいることの方が大切だと教えてくれた。また、彼はマレーシアの人はあまり長い間悲しむのを好まず、亡くなった祖父も残された家族には笑顔でいてほしいと思っているだろうとも話していた。私はこの研修を通して英語や文化を学んだだけでなく、彼らの前向きな性格や人生観までも学ぶことができたことに大変驚いた。彼らとの交流を深められたことは、通常のオンライン海外研修ではなかなか得ることのできない大変貴重な体験だった。

c. 研修体験・成果

マラヤ大学オンライン留学での成長

文学部1年 篠田真名

本プログラムでは、60時間の授業と授業時間外のバディとの交流により、様々な経験をすることができた。以下では、英語力、異文化理解、行動力の3つの観点から、研修成果を述べる。

まず、英語力については、英語を使うことに対する抵抗感がなくなったことが挙げられる。以前は、間違えることを恐れて英語での会話を避けることが多々あった。しかし、英語でのやり取りを繰り返すうちに、小さな間違いは問題ではなく、知っている単語を使って如何に伝えようとするかが大事であることが分かった。大体の物事は既知の基本単語で表現できることを実感し、コミュニケーションが成立する経験を数多く経験できたことで、英語に対する自信が非常に高まった。英語への抵抗感をなくすことができたことは、大きな収穫だった。

次に、異文化理解に関しては、知識及び姿勢を学ぶことができた。知識については、複数の宗教について一度に理解することができた。なぜなら、マレーシア人のほとんどはイスラム教徒だが、その他にも仏教徒、キリスト教徒、ヒンドゥー教徒といった様々な宗徒が混在しているためである。特にイスラム教の知識はほとんど無く、日本ではなかなかムスリムの人たちと交流する機会がないため、信仰者から直接話を伺うことができたことは、貴重な経験だった。姿勢については、共通点を見つけることの大切さを実感した。互いの文化の共通点を見つけた際は、一気に心の距離が縮まったからである。例えば、お米を毎日食べると聞いたときには、お米を話題に会話が弾んだ。異文化を理解しようとする際は、相違点だけではなく共通点を探することが重要であることが分かった。このプログラムを通し、異文化の知識及び異文化理解のための姿勢を学ぶことができた。

最後に、行動力については、積極性が身についたことが挙げられる。授業やアクティビティの中で、意見を発表する機会やプレゼンをする機会が数多くあり、マレーシアの学生は積極的に活動していた。日本であまり見られない光景を目の当たりにして、はじめはそのギャップに戸惑いを覚えた。しかし、マレーシアの学生が発表し、それに先生が答えて全員の理解がより深まるという活発な授業スタイルに感化され、私自身も徐々に積極的に発言することができた。最終的には、学生全員に向けて日本の学生生活を紹介する動画を

作成したり、出身地や日本文化をプレゼンしたりすることができたうえ、それらを楽しむこともできた。積極性が身についたことは、このプログラムでの大きな成果である。

以上では、本プログラムでの研修成果を英語力、異文化理解、行動力の観点から述べた。英語に対する抵抗感がなくなったこと、異文化の知識や異文化理解の態度を学んだこと、積極性が身についたことは、英語学習及び国際交流に向けたモチベーションの向上につながった。今後も留学プログラムや国際共修ゼミなどへの参加を通して、英語の勉強や国際交流に取り組み、さらなる高みを目指していきたい。

研修によって得た異文化理解

理学部 1 年 鈴木智也

私はこのプログラムを通じて、異文化理解について最も深い学びを得ることができた。このプログラムに参加する前、私は異文化に対して何も具体的なイメージを持っていなかった。今回の研修先はイスラム教徒が多いマレーシアということもあり、イスラム文化を始めとするマレーシアの文化について事前にインターネットなどで調べ、注意点やマナーなどについての知識を蓄えた。しかし、研修を終えて振り返ると、研修参加前の私は、異文化、特にマレーシアの主要宗教でもあるイスラム教文化に対して偏見を持っていたように感じている。日本の内側だけで生活していると、イスラム教に関する習慣や文化に触れる機会はほとんどなく、メディアではイスラム原理主義集団によるテロのニュースをよく目にするため、イスラム教に対してどうしても負の印象を抱きやすいと言われる。しかし、私は高校の地理の学習の中で、日本人はイスラムに対してそのような偏見を抱きやすい、ということを知識として知っており、自分としても十分に理解しているつもりであった。しかし、それでもやはり、研修参加前の自分の中には、異文化に対する排他的な性質、異質なものを忌避するような要素があったように思われる。

そんな私が研修に参加してしばらくすると、現地の学生たちの立ち振る舞いが、我々日本人のものと比べて全く違和感がないことに驚いた。それまでイスラム教を信じている人々に対して、厳格な規律を守り、粛々と生活を送っている人々、のようなイメージを持っていた私にとって、我々と同じように大声で笑い、冗談を言い合う彼らの姿がとても衝撃的だったのだ。

このような経験から、私が今回の研修で得た異文化理解に関する学びとは、異文化的背景を持つ人々とのコミュニケーションにおいて、文化的差異はそれほど重要な意味を持つものではない、ということだ。誤解の無いように断っておくが、異文化との文化的差異自体は非常に重要なものであることは確かである。異文化の習慣や風習を理解し、文化的に

適切な言動をすることは非常に重要であり、異文化の人と接するときには必要とされる態度である。しかし、私が学んだのは、そのような文化的差異が意識されるのは始めのうちだけであり、次第にその差異に慣れ、意識の外側へと消失していく、ということである。その時必要とされるのは、「異文化の人と接する」ことではなく、単に「人と接する」ことである。しかし、このことが非常に難しいことは、日常生活の中で誰もが感じていることであろう。文化的背景が違って人間性な性質は変わらないという点では、人間はどこへ行っても同じであり、それと同時に、文化的な差異よりも一人一人の人格的差異の方が大きな意味を持つという点では、人間はどこへ行っても違う存在である、ともいえるのだ。月並みではあるが、例え異文化の内側であっても、人と人のコミュニケーションの本質は変わらないという事が、今回の研修を通じて私の一番の学びであった。

研修を通して得られた成果

農学部1年 方波見さち

今回の研修を通して得られた成果を、言語運用力、異文化適応力、行動力の3つの観点から述べる。

言語運用力という観点では、英語でレポートを書く力、英語で質問を考える力、会話力が向上した。Writing and Composition のクラスでは英語でどのようにレポートを書くのかということについて学んだ。授業中に、レポートの構成などを学び、宿題でレポートを実際に書くことで、ライティング力を身につけることができた。さらに、文法の授業では、時制について学び、それに関連する、疑問文の作り方を学んだ。そこで学んだことを実際のボディとの会話で用いることで、身につけることができた。また、授業中のグループ活動や、午後のアクティビティを通して、様々な人と会話をし、英語力はもちろん、会話する能力も向上させることができた。このように、授業で英語を学び、アクティビティで実践を重ねることでレポートを書く、質問をする、会話という点から言語運用力が向上した。

異文化適応力という観点からは、マレーシアの多文化社会について理解し、人々がどのように多文化社会で共生しているのかということについて学んだ。さらに、日本の文化を紹介することで、自国の文化をより深く理解し、マレーシアの文化との相違点、類似点を見つけることができた。まず、Malaysian Studies の授業では、マレーシアの食文化、宗教、民族衣装など、様々なことを学んだ。さらに、午後には、実際に伝統的な衣装を見たり、ダンスを体験したりする機会があり、マレーシアの文化を感じることができた。この活動を通して、マレーシアの人々が互いの文化を尊重しながら、調和して生活していると

いうことを学んだ。また、日本の文化である、アニメや漫画はマレーシアでも人気があり、大衆文化という点では、似ている所もあると感じた。これらのことから、多文化社会で、互いの文化を尊重しつつ、共生していくことが大切だと学んだ。日本の文化を紹介した時には、自国の文化に対する意識が高まり、深く理解することができた。他国の文化を学ぶ際、相違点に目が行きがちだが、実際には類似している点も多くあるということも学んだ。

行動力の観点から、積極的に英語を用いることができるようになり、他の人の意見を聞いた上で、自分の意見を述べるできるようになった。自分のことについて話したり、質問されたことに答えたりする上で、徐々に英語を話すことへの抵抗感がなくなり、自分の英語に自信を持つことができるようになった。また、ディベートでは、他の人の意見を聞いた上で反論する必要がある、行動力が向上した。このように、英語を話すことを通して、積極的に意見を述べるできるようになった。

今回の研修を通して、言語運用力、異文化適応力、行動力という3つの観点から、大きく成長することができた。習得したことを忘れないように、今後も、英語学習を継続し、学んだことを活用していきたい。

オンライン留学による研修成果

農学部1年 松田夏奈

今回のプログラムが私にとって初めての留学体験だった。とても大変ではあったが、3週間英語で授業を受け続け、バディたちとディスカッションをしたり、ゲームをして交流をしたりするという経験によって様々な成果を得ることができた。本稿では、言語運用能力、異文化適応力、行動力の三点に関しての成果について述べる。

初めに、言語運用能力について述べる。全ての活動を英語のみで行うことで、プログラム全体を通して苦手意識が強かったリスニング力を鍛えられたと感じた。また、文章の書き方や時制など、それぞれの授業で4技能の基礎となるようなこと学ぶことができ、3週間という短い間であっても総合的な英語力向上のきっかけを得ることができた。さらに、オンラインでのプログラムだったために、マラヤ大学の担当者にメールを送ったり、バディやインストラクターとLINEでやりとりしたりしたので、英語でのメールの書き方やテキストメッセージで使われる言い回しを知る機会にもなった。

次に、異文化適応力について述べる。今まで他国の文化に触れる機会はほとんどなかったが、このプログラムでは、Malaysian Studiesの授業のなかで、マレーシアの文化や社会などについて学ぶとともに、マレーシアのバディたちから異文化を尊重する姿勢について

も学ぶことができた。マレーシアは多文化社会の国であり、マレーシア独自の事柄はもちろん、世界中で共通している様々な宗教のタブーや習慣についても知ることができた。これらは、グローバル化が進み、海外で活動することが増えると予想されるなかでとても役に立つと感じた。

最後に、行動力について述べる。私は、今回の体験を通し、知っている範囲の英語を用いて自分の意見を積極的に表明することの重要性を学ぶことができたと感じた。グループディスカッションやディベートなど、このプログラムでは自分の意見を話すことが求められる機会がとても多かった。私はこれまで、自分の英語力に自信が無いために、そのような場で自分の意見を発表することがとても苦手だった。しかし、今回の留学では、私が正しい英語が思い浮かずに少し間違った表現を用いたり、曖昧な発言になったりした場合にも、バディたちが意図を汲み取ってくれ、また、それぞれに話を振って意見を聞いてくれたため、自分の意見を話しやすかった。文法や語の用法として間違ったことであっても英語が話せる相手にはある程度意図を汲み取ってもらえるので、英語での正しい表現が思い浮かばないからと消極的になるのではなく、分かる範囲でとにかく自分の考えを表明することが、行動力の面でも、英語力を向上させるという面でも重要だと感じた。

このプログラムに参加して得た成果を生かし、今後も英語力の向上を図るとともに、様々なことに挑戦していきたい。

プログラム全体を通して得たこと

経済学部 1 年 高屋映里

今回のマラヤ大学オンラインプログラムを通して、英語に関する知識やスキル、そしてマレーシアの文化について多くのことを学んだ。しかし、そのほかにも私がこの3週間の間で得た大切なと感じたことが3つある。

1つ目は授業に積極的に参加することである。このマラヤ大学の授業では質問に答えたり自分の考えを話したりする機会が多く、授業で自ら発言することが求められるものの、最初は、自分から発表することができずに授業を受動的に受けていた。なぜなら、自分のつたない英語で間違ったことを言ったり、途中で止まったりすることを恐れていたからだ。しかし、マレーシアの学生たちはどんどん自分の考えを話し、分からないことがあったら恥ずかしがらずに質問する。その授業へ積極的に参加する態度に非常に感銘を受けると同時に、自分自身も負けていられないという刺激にもなった。よい授業をつくるのは先生だけではなく、その授業に積極的に参加する学生も大きく関わっている。このことを意

識して、英語だけにかかわらず他の大学の授業についても積極的に参加しようと考えようになった。

2つ目は失敗を恐れないことである。授業は全て英語で行われるため、先生が話していることや質問されたことを理解できなかったり、発言するときにも自分の伝えたいことがうまく表現することができなかったりして、もどかしさを感じることも多くあった。しかし、マレーシアの先生や学生は私たちが間違ったり意味を理解できなかったりすることがあってもなんとか意味をくみ取ろうと努力してくれた。さらに、私たちが自分の意見を伝えたことを喜び、よりたくさん発言するように促してくれた。私はもともと自分の意見を発表することが苦手で現在も克服できたわけではないが、このプログラムを通して大分抵抗感を薄めることができた。

3つ目は日常的なことからも学べることはたくさんあり、それらは自分から見つけにくいべきだということである。これは Reading の授業を通して実感したことである。Reading の授業では英語の短い物語だけでなく、メジャーな洋画も教材で、それらの中から新しく知った単語やお気に入りの台詞をピックアップしたり、要約をしたりした。選んだ洋画はアラジンやハリーポッターなど何度も見たことのあるものだったが、知らない単語がたくさん出てきたり、今まで聞き流していた素晴らしい台詞に気づいたりするなど新たな発見がたくさんあった。私は今まで洋画や洋楽などを娯楽と捉えて楽しんでいたが、これらも扱い方によっては立派な英語学習の教材となり得ることを知った。むしろ、単語の意味を覚え、素敵な台詞を見つけることで理解が深まって、作品をより楽しむことができるだろう。これからは単語帳の暗記や英文読解などによる英語の勉強だけではなく、洋画や洋楽、洋書などを楽しみながら英語を学んでいきたい。

多文化社会の魅力と英語に対する認識の変化

理学部1年 花木ひかり

私がこのプログラムを通して得たこととして、異文化と英語に対する認識が大きく変わったことがあげられる。これらはどちらもプログラム開始前はこれほどに変化するとは想像していなかった。

まず、異文化の捉え方の変化について触れたい。プログラム開始前、異文化と聞くと異文化間の摩擦による問題点にばかり注目してしまい、異文化交流では異文化間の摩擦をいかに減らすかが重要だと思っていた。日本という単一文化社会で育ち、外国人と接した経験も少ない私にとって、異文化と言われてまず頭に浮かぶのは新聞などで取り上げられる異文化間の摩擦による問題点だったというのがそのような認識の原因だったのかもしれない。

い。そのため異文化交流に関して少し緊張して、このプログラムに臨んだが、現地マレーシアのバディたちが私たち日本人参加者を大変暖かく受け入れてくれ、そのような緊張はすぐに忘れて交流を楽しむことができた。マレーシアにはマレー系、中華系、インド系の三つの主な民族の人々が暮らし、宗教もイスラム教、仏教、キリスト教など、様々である。プログラムを通してマレーシアの多様性について学ぶにつれ、マレーシアのバディたちの暖かさはこの多文化社会によるものなのかもしれないと考えるようになった。マレーシアのバディたちの中にも、前に挙げた三つの民族が存在し、宗教も異なっていた。しかし彼らは互いの違いを当たり前のように受け入れて尊重しあっていた。その様子を表すちょっとしたエピソードを一つ紹介したい。午後のアクティビティで中華系のバディが文化紹介をしてくれた時のことだ。中華系の彼女が中華系の伝統料理について紹介すると、ムスリムのバディが「それって私も食べられる？」と尋ねた。「豚肉を入れることもあるけど入れないで食べることもできるよ！」と中華系のバディが答えた。ムスリムの人の前で豚肉の話は避けた方がいいのではないかと漠然と考えていた私にとって、この自然で何気ないやり取りさえも新鮮だったし、マレーシアのバディたちのスムーズで心地よい異文化交流から、その魅力を大いに感じることができ、多文化社会の文化の豊かさに気づかされた経験となった。

次に英語に対する認識の変化についてであるが、このプログラムに参加する前は、英語は身に着けるべき技術という印象が強く、実際英語を使う機会も英語学習の場面に限られていたため、技術習得のために英語を使うように心がけるといふ手段と目的が逆転した状態だった。さらにプログラム参加前はそのような現状に気づいてすらいなかったように思う。このプログラムで英語が唯一のコミュニケーションの手段である環境に身を置いて初めて、英語の必要性を実感できるようになった。特に、私にとって英語で日常会話・雑談をするのはこのプログラムが初めてだったので、自分の英語に対する認識を大きく変えた要因としてそれらを具体例として紹介したい。プログラム開始前、私はスピーキングスキルを向上させるべく、プログラム中はとにかくたくさん英語を話さなければと焦りに近い意気込みを感じていた。しかしプログラムが始まってバディと zoom で会話をしてみると、日本語のコミュニケーションと同様に相手と自分の話す量に気を使ったり、口調や使う言葉の選択でニュアンスを伝えたりする必要があり、英語はあくまでコミュニケーションの手段であって、正確すぎるかたい英語をたくさん話せばいいわけではないのだと気づいた。はじめは今までそのような認識がなかったため少し戸惑ったが、だんだん慣れてくるにつれ、友達の使った言い回しが気に入ったから自分も使ってみよう、この単語を使った方がニュアンスが伝わるかな、など、自分の言葉で話す楽しさを感じることができるようになった。このような経験から、英語はコミュニケーションのための手段で、自由に楽しみながら使っていていいのだと認識するようになった。

紹介した二つのこと以外にも、今回このプログラムでは自分が思っていた以上のことを得ることができたと感じている。得たことをこれからにつなげていきたい。

特徴的研修成果

工学部 2 年 池尾典

今回のプログラムは、授業と授業外のアクティビティの二つが主な活動であった。コロナウイルスの影響によって全てオンラインで行われたが、どちらの活動もとても有意義なものであった。それぞれの活動における私の学習体験を分析し、その結果、得られた成果について以下に述べる。

1.体験

授業では主に英語の 4 技能について学び、これに加えマレーシアの文化についても学ぶ機会があった。英語の授業では、エッセイの構造理解と作成手順、発音や発話、文章や話の要約、文法などについて学んだ。習ったことがあるものも多くあったが、英語だけを用いて学び直すことで、英語で物事を理解する良い訓練になった。また、議論やプレゼンテーション、発言や発表の機会が非常に多く、「使える英語」を身につけるための機会が豊富であった。これらは英語能力を向上させるだけでなく、伝わりやすいコミュニケーションの重要性を気づかせるものであり、実践する大切な場でもあった。

一方で、授業外のアクティビティでは、ゲームや会話、バーチャルツアーなどを通じた現地学生との交流ができた。ここでは授業とは異なり、比較的自由に、また気軽に学生と会話を交わすことができた。そのため、プレゼンや議論で使う丁寧な英語というよりも日常会話で用いられるような英語に多く触れることができた。これは日本で受ける英語の授業では体験することが難しく、英語をコミュニケーションに用いるためには非常に重要な体験であった。オンラインという制約はあったものの、とても有意義であった。

2.成果

一つ目に得られた成果はリスニングとスピーキングの能力である。授業は全て英語のみで行われるため、英語で聞き、理解し、話さざるを得ない状況であった。したがって、毎日英語を用いることでこれらの能力を向上させることができた。また、議論やプレゼンでは質疑応答の時間があり、即座に聞き、答えるという能力を鍛えることもできた。英語のみでの様々な活動を毎日続けることで、リスニングとスピーキングを向上させることができた。

二つ目は行動力である。授業では先生から指名されることもあったが、自分から挙手をして答える形式が多かった。また、授業外の活動でも自発的に感想などを述べることも多かった。つまり、自分から行動を起こすほど授業や活動に関わることができ、学びの機会が多く得られる形式であった。使い慣れていない英語で、また外国の学生も多くいるとい

う状況で発言をするのは緊張するものであったが、貴重な機会だと考え、積極的に発言した。上手い発言や回答ができていたかどうかはわからないが、自ら行動を起こし発言した内容が相手に伝わった時、またそれが受け入れられ、案として採用された時、大きな達成感を得た。この経験から自分の行動に対して少し自信が増した。自ら行動することの難しさと、それを乗り越えた時に得られるもの、そしてそれらの経験全ての重要性を学び、以前よりも行動力を高めることができた。

以上が今回のプログラムで得られたことの一部である。他にも得られたものは多くあるが、授業と授業外アクティビティを通して得られたリスニング・スピーキング能力と行動力は非常に大きな成果であった。今後もあらゆる活動の積極的な参加を通して、多くの経験と学びを得ていきたい。

プログラムを通じて得た経験と成長

工学部 2 年 原幸日

今回のプログラムは三週間という短い期間であり、新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンラインでの開催となったが、私はプログラムを通じて多くのものを得ることができた。本稿では私が得た経験と成長について、英語によるコミュニケーション能力、異文化理解、IT 運用能力という三つの点から述べる。

まず最初に触れたいのは英語でのコミュニケーション能力の向上である。プログラムでは平日は一日四時間もの講義が行われた。また放課後や週末にも現地のバディと会話したり、ライン等でやり取りしたりする機会が多くあった。これらの活動における使用言語はもちろんすべて英語である。私は初め自分の英語能力、特にスピーキングについて自信がなく不安を感じていた。日本での生活では実際に英会話に触れる機会が全くといっていいほどなかったからだ。しかし三週間生の英語に触れ続けたことで、少しずつ語彙や表現が増え英語でのコミュニケーションを楽しめるようになっていった。言語を習得する一番の近道はその言語を使うことであるとよく言われるが、プログラムではそれを肌で感じた。これからの英語学習では意識して英語を使う機会を確保していきたいと思う。

次に述べるのは異文化理解の深化である。マレーシアと日本では宗教、衣食住をはじめ文化的には大きな差がある。中でもプログラムが始まる前に私が最も懸念していたのが宗教観の違いだった。マラヤ大学の学生はムスリムが多く、無宗教の自分はうっかり不用意な発言をしてタブーに触れ、彼らに不快な思いをさせてしまうかもしれないと心配していた。ところが話してみると彼らはどんな文化に対しても寛容で、私たちの文化に興味を持ち、マレーシア文化についての質問にも丁寧に答えてくれた。宗教の違いで壁を感じる

こともなく、多民族・多文化国家ならではの余裕を感じた。日本でも最近是他国の文化に触れる機会が増えてきたが、これまでの私を含む日本人の多くは他国の文化を「自分たちとは違うもの」として無意識に距離を取っているように思う。もちろん文化の違いは存在するが、それを受け入れることで異文化の者同士でも共生できるのだと今回学ぶことができた。

最後にオンラインプログラムだからこそ得られた成長について紹介する。それは IT 運用能力の改善である。マレーシアの友人たちは情報技術の扱いに長けており、私は自分との差にショックを受けた。例えばプレゼンのスライド一つとっても彼らの作るものは動画やアニメーション、デザインに工夫があり、これまで文字の色くらいしか考えてこなかった自分とのレベルの差に愕然とした。そして、その体験がモチベーションとなり、文化交流や事後研修のプレゼンの際には構成やグラフィックを工夫したスライドを作ることができた。情報技術の扱いに関してはまだまだ至らない部分が多いが、他国の同世代に対する遅れを実感したことで、今後の自分の成長のための良い刺激を得られたと思う。ますますグローバル化が進む中、将来彼らに負けないようにこれからも自分の IT 運用能力を磨いていきたいと感じている。

三週間という期間は終わってしまえばあっという間であったが、私は想像していたよりもずっと多くのことを学ぶことができた。当初英語運用力の上達を目的として参加したプログラムだったが、異文化理解や情報技術についても自らの成長を実感することができた。今後は今回の経験をもとに、上で述べた三つの点についてさらなる能力向上を目指したいと思う。

プログラムで得たこと

医学部 2 年 佐藤朱李

ここではプログラムで得た成果のうち、言語運用能力、異文化適応力、行動力の 3 つについて述べる。

言語運用能力のうち、最も力がついたのはリスニング力である。毎日 4 時間ある授業も、授業後のアクティビティも、すべて英語で行われるため、このプログラムに参加した誰もが必ず英語に慣れることができる。留学初日には授業中に講師が言っていることが分からず、質問をされても上手く答えられなかった。しかし、数日授業を受け、バディと会話を重ねるうちに徐々に現地の講師と学生の話についていけるようになった。英語の映画を日本語字幕なしで最後まで見て内容を理解できたときや、ゲームのルールを英語だけで理解し楽しめたときはリスニング力の向上を実感できた。

次に、異文化適応力について述べる。留学前はマレーシアについて全く知らなかったが、Malaysian Studies の授業を受け、授業後のアクティビティで繰り返し現地の生活に触れるうちに、彼らの文化について知るようになった。特に、ここでの最も大きな学びはマレーシアの宗教文化についてである。マレーシアはイスラム教徒の人口が最も多い。イスラム教の人と長い時間一緒に過ごすのは初めてだったが、今まで教科書で習ってきたムスリムのイメージが大きく変わった。以前はイスラム教という大きな枠組みでしか見ていなかったが、彼らは宗教に関係なく同じ世代の大学生であり、それぞれ趣味があったり、ペットを飼っていたり、別の国に留学していたり、就活していたりする個人であると学んだ。イスラム教以外の仏教、ヒンドゥー教の現地学生もバディとして参加しており、マレーシアが多文化国家であることも実感した。「友達にヒンドゥー教の人がいるから、彼らの結婚式について知っている」などという、身近な異文化を受け入れる姿勢も学ぶことができた。私はずっと日本に住んでいたため、この考え方は新しいもので、学ぶことができて良かった。

行動力については、今回最も成長することができた。今まで私は行動力がある方だと思っていた。しかし、英語になったら、英語話者の反応が不安で、日本語を使っているときと同じようには振る舞えなかった。それでも日を重ね、バディや講師と仲良くなるにつれて緊張しなくなり、留学前に「毎日1回以上クラスで発表する」という目標をほとんど達成することができた。クロージングセレモニーでバディから「最初、朱李は内気であったが、本当に変わった」と言ってもらえた。他者からも分かるほど自分を変えることができ、自信につながった。

最後に、このマラヤ大学の研修は、オンラインとは思えないほど充実していた。オンラインだからこそ、コロナ後にはバディに会いにマレーシアへ行くというモチベーションも生まれた。英語力を鍛えることができ、マレーシアの学生の温かさに触れることもでき、とても満足できた。今後も今回習得した言語運用能力、異文化適応力、行動力を伸ばし続けたい。同時に今回出会ったバディとは連絡を取り続けたい。

Summer Enrichment Programme での体験・成果

文学部2年 高橋晴佳

私は2021年度夏季に実施されたマラヤ大学オンライン研修(English)に参加した。プログラムは全てオンラインで行われたほか、期間が三週間という短い期間ではあったものの、期待していた以上に濃密な時間を過ごすことができた。そして、このプログラムの最大の魅力とも言える点は、参加者一人一人にマラヤ大学のバディがつくという点である。

本稿では、バディとの交流に関しても触れつつ、このプログラムにおける体験に関して、「1.マレーシアの文化の体験」で、成果に関して、「2.英語力の向上」で述べる。

1. マレーシア文化の体験

先に述べたようにこのプログラムは全日程オンラインで行われたが、マラヤ大学の学生たちが準備してくれたアクティビティや各授業、バディとの SNS 等を通じた交流のなかでマレーシア文化の一端に触れ、実際に体験することができた。1 日の授業が終了すると、マラヤ大学の学生たちが、さまざまなアクティビティを準備していた。その中には、マレーシアのバーチャルツアー、マレーシアの食べ物、伝統工芸等の紹介が含まれており、学生が自分の出身地域の文化や観光名所に関して、スライドショーやビデオを作成し、発表してくれた。それ以外にも、マレーシアの伝統的なダンスを学び、実際に振りを教わった。私についてくれたバディは週末に時間を作り、リアルタイムでビデオ通話を繋ぎながら、実際に街を歩いて伝統的な染め物を作る作業場や、景観を紹介してくれたりした。

2. 英語力の向上

このプログラムに応募した最大の目的は、実際に英語で開講されている授業を受講したり、バディと交流したりすることを通して、自身の英語力を特にリスニング、スピーキングの観点から向上させることにあった。実際、授業で教員が話す英語が速かったため、初めの一週間はついていくことが難しく、授業後に自分のバディと連絡を取り、出題された課題などの情報を確認し、なんとか乗り切ることができるような状況であった。二週間目、三週間目と週を重ねていくうちに、教員の話し方に少しずつ慣れ、また、授業の進め方などが段々と分かってきたこともあり、初めに比べれば、英語で情報を聞き取ることができるようになったと感じた。常に英語を聞く環境に身を置くことで、リスニング力や英語で物事を考える力がついた。さらに、バディとの交流を通し、英語による日常会話や SNS でのやり取りに慣れることができたように感じる。

以上のように、私はこのプログラムを通し、マレーシアならではの体験や、英語での会話の機会を得ることができた。マラヤ大学のバディの協力なくしては、このような体験や成果は実感できなかったと感じている。さらに、今回の研修は、プログラム終了後の英語学習に対するモチベーションにもつながったと思う。

プログラムを通して習得したこと

工学部 3 年 ト部真聖

今回の研修を通して学んだことを英語力、異文化理解、積極性の観点から述べる。まずは、英語力の観点から述べる。このプログラムは 3 週間であり、授業は平日に一日 4 時間

あった。また、授業後にはマレーシアのバディが様々なゲームやバーチャルツアーを企画してくれたり、土日には一緒に映画を見たりと英語にふれる時間が長かった。そのため、英語に対する苦手意識が少なくなったように思う。

実質的な面で言えば、今回のプログラムを通してリアルに使われている単語にふれたことと、文法力の面で大きく英語力が上がったことが収穫だった。プログラム期間中は、バディとのコミュニケーションや授業の課題などは全てラインで行われた。例えば、グループではマレーシアのバディ同士のリアルな英語コミュニケーションなども見ることができ、分からない単語や知らない言い回しが多くあった。また、ラインで返信するときも同じ言い回しにならないように気をつけることで、より多くの言い方を習得することができた。つまり、マレーシアのバディたちとの会話する機会がとて多く、それによってよりリアルに効率良く英語を吸収できたと思う。文法に関しては、文法の全ての時制について文法の授業を通して詳しく学んだ。もちろん時制については既に習っていて知っている点もあったが、全て英語という点が新鮮でまた難しくもあった。また、新しく学ぶ点も多くあり、例えば、完了形についての理解が深まった。今まで過去形で表現していたことも完了形の方が適切なことも多かった。これは writing にも生かすことができると思う。

次に異文化理解の観点から述べる。マレーシアは様々な文化や宗教が存在している多民族国家である。そのためそれぞれの文化に由来する祝日や観光地、食べ物などが共存しており、異なる文化や宗教を持つ民族の人同士がお互いの文化を尊重している空気があった。例えば、国教はイスラム教であるものの、信仰の自由が認められており、それぞれの宗教の祭日を祝日として制定している。そのようなところからも多様性が感じられ、またこれは日本にのみ住んでいるとなかなか体験できないものだった。その点今回のプログラムは、文化の多様性の受容と異文化の理解という点ではとても適当であった。

最後に積極性の観点から述べる。今回のプログラムはオンラインで行われたため、特に大きな問題もなく、家から毎日授業を受けるスタイルであった。つまり、自分から行動しないとただ授業に参加するのみとなってしまう。そのため、皆積極的にバディと連絡を取ったり、放課後のアクティビティに参加したり、グループの課題に取り組んだりしていたように思う。私も、そのような姿勢に触発されて最終日近くにある日本の文化をシェアする機会に立候補した。今までなかなか自分から立候補することがなかったので、これは大きな進歩だと思う。これから今回プログラムで学んだことを継続するとともに自分から新しいことにチャレンジしていきたい。

英語はあくまでコミュニケーションのツール

工学部 3 年 三瓶翔太

このプログラムを通して習得したことを、英語運用における行動力、異文化適応能力の 2 つの観点から述べる。

英語運用における行動力について、私は 4 技能(speaking, reading, writing, listening)及び「間違いを気にせずに会話する」コミュニケーション能力を向上させることができた。このプログラムでは、当然ではあるが英語で授業し、英語で会話し、英語でマレーシアの学生と交流することになる。したがって、普段の生活よりもずっと英語に触れることが多くなるため、留学経験の無い自分にとってはとても刺激的で有意義なプログラムとなった。とは言え留学序盤では授業についていくことができず、ひいては自分の英語が全く通じないことさえもあった。その時に手助けとなったのがローカルバディと自分の行動力である。私は留学前に「わからないことがあれば積極的に質問すること」を目標としていたため、英語で聞き取れない場合は直ぐに”Can you repeat?” などと言うことで助けを求めた。そしてその度にローカルバディは快く引き受けてくれ、自分の理解を促すことができた。このような試行錯誤を繰り返していく内に、授業を英語のまま聞き取って理解できるようになり、自分の英語が通じないことがあっても間違いを恐れずに他の言い換えなどを行うことによって補う行動力を養った。

異文化適応能力については、私は他者の立場を尊重することの大切さを学んだ。このきっかけとなったのが「マレーシア人でさえも英語が訛っており、しかも人種によってその訛り方が異なる」ことの発見である。留学先のマレーシアの文化に関する授業で、「マレーシアの英語にはマレー語をはじめとする他言語の訛りが混ざっている」ことに驚かされた。実際にマレーシア人学生の発音を聞いてみると、アメリカ英語のように流暢な発音もあれば中国語に少し似た発音、マレー語特有の音節が明確な発音が見受けられた。そして彼らはたとえ訛っていたとしてもお互いを尊重して会話をし、適宜わからないところは質問などをしてコミュニケーションを図っていた。このことから、英語というものは決して完璧さや正確さに拘る芸術作品のようなものではなく、あくまでコミュニケーションをとるための手段に過ぎないことを実感した。上述の通り自分の間違った発音に対して彼らが寛容であったのも、このことを理解していたからであろう。これは英語だけで無く、日本国内の留学生とやり取りする上でも言えることであり、他者の立場を考慮し、理解しようとするものの大切さを実感した。

最後になるが、英語をはじめとする他言語を用いて話すのは難しいことであるし、気後れもするだろう。正直私自身、普段使う機会などない英語は好きではなかった。しかし、このマラヤ大学の留学プログラムにはたとえ間違った英語でも受け止めてくれ、そして語

学への興味やスキルを向上させてくれる環境が揃っているので、留学しようか悩んでいる方がいるのであれば強くおすすめしたい。

英語との距離

工学部3年 伊藤祐希

私はこのプログラムを通して主に3つのこと得ることができた。1つ目は英語の運用能力の向上である。まず、当然ではあるがこのプログラムは全てが英語で行われる。授業内容はもちろん、授業前の軽い雑談、出欠確認、質問なども含まれる。これらのことをマレーシアの学生が実際にしているのを見て、自然な表現を学ぶことができた。またリスニングのスキルに関しては毎日の授業を集中して聞いているだけで自然と伸びていくのを実感することができた。またマレーシアの英語は、イギリスに統治されていたという歴史からイギリス英語がもととなっている。それに加えてマレー語の訛りが入っており、アメリカ英語になじみのある私にとっては新鮮なものであった。将来ビジネスシーンで英語を話すことを考えると、様々な国のアクセントのある、様々な英語を聞き取る力が必要になってくるので、そのような観点からもマレーシアの英語を3週間みっちり聞くことができたというのはとても価値のある経験であったと思う。

2つ目は、正しい英語でなくとも発言することの大切さを学び、英語で発言する自信をつけることができたことである。私がとても印象的であったのはペアになった日本人バディが、決して流暢な英語ではないが単語と単語を並べて、マレーシアバディを笑わせていたことである。それによりとても友好的な関係を築いていたように見えた。それを見て、英語力よりも大切なのは伝えたいと思う気持ちと、どうにかして伝えようとする意志なのだと感じた。私は英会話となると少し身構えてしまい、話すことに精一杯になり、自分のミスに気にしすぎてしまうことがあった。しかし、結局は人と人とのコミュニケーションであり気にするべきは自分ではなく相手の気持ちなのだと強く感じた。それからは、話すことにためらいも少なくなっていき、プログラム後半では英語で発言することの恐怖を払拭することができていた。これはこのプログラムで得た一番価値のある事の一つである。

3つ目は英語学習の楽しさを知れたことである。私たちが今までしてきた英語の勉強というものは、机に向かいひたすら文章を読んだり、単語を覚えたりと言ったものであったと思う。しかしこのプログラムでは、英語の歌や映画を教材として使うなどしており、とても楽しみながら英語を勉強することができた。またバディとの交流では、異文化に触れることや、様々な国の人と意見を交換する素晴らしさを知ることができた。バディと色々な話をしている中で、宗教など異なる点だけでなく、好きな歌手や映画など多くの共通点

を見つけることができ、国や文化は異なっているにもかかわらず友達のような関係を築くことができた。この経験を通して、退屈だと思っていた英語の勉強を、楽しいものであり、価値のあるものだと感じるができるようになった。

このプログラムを通してこの3つの事を学んだことで、英語との心理的距離を縮めることができ、英語の勉強のモチベーションを上げることができたと思う。これからも勉強を続けることでより多くの学びを見つけていきたい。

オンラインで学べたことの意義について

医学系研究科修士1年 汐川菜々子

今回、マラヤ大学のオンライン留学のプログラムに参加し、オンライン授業やバディとのアクティビティで得られた気づきと今後の英語学習に生かしていきたいことについて述べる。

プログラム参加前はオンライン留学で英語をどこまで勉強できるのか疑問に感じていた。しかし、授業中のマレーシアの学生の積極的な姿勢や、学生とコミュニケーションをたくさん取ろうとする講師の姿勢にかなり驚いた。授業を聴講するだけではなく、参加することが重要であると感じた。特にオンライン授業では講師の呼びかけに対して反応すること、質問すること、発言することが授業を円滑に進めるだけではなく、学生全体のモチベーションを高めると感じた。実際、授業内でたくさん発言する学生は授業外のアクティビティでも活躍しており、講師にも顔を覚えてもらっていた印象があった。今回は人数が多いプログラムであったため、授業で発言することは非常に重要であると感じた。英語を使って大人数の前で積極的になるということはかなり難しいことであると感じ、その難しさについては現地の留学でもオンラインの留学でも変わらないと思う。そのため積極的に参加をすればオンラインでも英語でのコミュニケーションについては十分学ぶことが可能であるということが分かった。また、オンラインでは現地の学生とどれくらい仲良くなれるのかについても不安に感じていたが、授業外のアクティビティはかなりのラインナップがあり、どれも楽しむことができた。マラヤ大学の学生が自分達の文化や大学についてとても楽しそうに話す姿が印象的であった。

特にバディとはビデオ電話を使用して、バディは家や近くの公園、私は大学の構内や図書館など、お互いの生活について紹介し合った。現地に行くところらの生活について紹介することはなかなか難しいと感じたが、日本で大学生の生活について紹介することができ、かなり興味を抱いてもらえたので、オンラインのメリットを生かすことができた実感した。

英語学習に関しては、三週間のプログラムを通して一番向上したと感じる点はリスニングの能力である。プログラム開始時は講師の話している内容が全く聞き取れず付いていけないか不安であった。また授業中はグループワークが多いため、一人がワークの内容を把握できていないとグループワークが成り立たないので、最初はしんどいと感じることが多かったが、授業に参加するにつれて内容を聞き取れるようになってきたことと、わからなければ質問すればよいという気持ちに変化したため、プログラム後半は比較的楽しみながらそれぞれの授業に参加することができた。また、リーディングや発音の授業では、複数の現地学生と一緒に映画や音楽を楽しむ時間があった。映画や歌詞に出てくる単語を調べるなどをして、楽しみながら英語を勉強するという観点は今までの自分の中にはない新しい価値観であったため、今後もその勉強法を継続していきたいと思っている。

今回のプログラムでは、東北大学だけではなく、日本の他大学の学生も参加しており、現在のパンデミックの状況下で他大学の学生と関わる機会を得られたことも、プログラムに参加した意義であると感じた。日本の学生の英語を学ぶ姿勢からも刺激を受け、今後も英語学習を習慣にしていこうと思っている。全体を通して課題が多く、時間もかなり取られるので大変だと感じる場面もあったが、バディと深く関わりを持つことができ、質の高い授業をこの価格で受講することができる機会は他にないと感じている。また機会があれば是非参加したい。

本研修で得ることができた体験・成果

医工学研究科修士 1 年 樋口健

私が本プログラムを通して得ることができた研修体験・成果としては、「英語運用能力の向上」、「マレーシア文化の理解」、「バディとの交流で学んだ知識や思い出」の3つが挙げられる。

まず英語運用能力については、4 技能 (Listening, Reading, Speaking, Writing) すべてにおいて向上させることができたと感じている。Listening については、プログラム全体を通して基本的にすべて英語を用いたコミュニケーションであり、さらに授業の一環でバディらと共に映画を観る機会があったためかなり鍛えられたのではないと思う。それと同時に Reading 力も、英語字幕で観た映画や課題で読んだ小説によって向上させることができたと思われる。Speaking については、常に英語で会話する必要がある以上、即興で英文を組み立てて話す力を鍛えることができたと感じる。最後に Writing については、エッセイなどの基本的な文書の書き方を学び、Writing にかなり慣れることができた。さらに、3 週間授業内外で英語漬けの生活をしていたため、頭の中で自然と英語で物事を考える癖がついたと感じた。

また、本プログラムではマレーシアの文化を大いに学ぶことができた。参加前はマレーシアに関する知識はほとんど無かったが、参加後にはマレーシアは日本の次によく知っている国と言えるまでになるほどの多くの知識を得ることができた。マレーシアは複数の文化が混在する国家であるため、授業ではマレー系、中国系、インド系それぞれについての宗教、行事、伝統的服装などの紹介があるのが大変印象的だった。オンラインであったため現地で実際に観光地を訪れたり、料理を味わったりする機会が無かったのが非常に残念ではあったが、それを補って余りあるほどの様々な観光地へのバーチャルツアー、数多くの料理の紹介などがあり、非常に魅力的だった。

最後に、このプログラム最大の特徴でもあるバディとの交流では、通常の授業だけでは体験できない非常に楽しい時間を過ごすことができた。もう一人の日本人学生とバディの計3人で、お互いの国の文化などを紹介したり、他のグループと共にゲームをしたりするなど、非常に充実した時間を過ごした。また、バディから Jawi（マレー語のアルファベット）やイスラム教の習慣なども教わり、友人としてマレーシアでの生活について詳しく知ることができ大変勉強になった。また、研修期間中にバディの祖父が急逝してしまった際には、彼はお葬式などの様子まで共有してくれた。私は、もしかしたらバディが本当はとても辛い思いをしている中、無理をしているのではないかと心配になってしまった。しかし彼は、亡くなった祖父は残された家族には長い間悲しみにくれずに笑顔でいてほしいと思っているだろうし、自分や周りの人が笑顔でいたり笑ったりしていられることはとても大切なことである、ということを教えてくれた。私は彼のポジティブな考え方に感銘を受けたと同時に、彼らとの交流を通じて英語や文化だけでなく、彼らの人柄や前向きな気持ちでいることの大切さなど人生観までも学ぶことができたことに大変驚いた。

3週間で、英語能力やマレーシアの文化だけでなく、より大切なことも学ぶことができたこの研修に参加してとても良かったと改めて感じた。今後は得られた知識を英語学習などに活かしていき、さらにこの研修で興味を持つことができたマレーシアに是非とも実際に訪れてみたいとも思った。